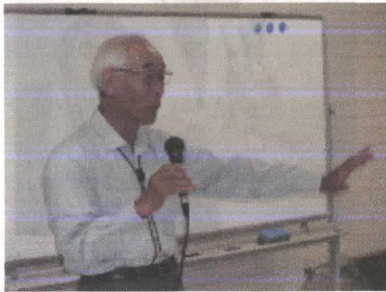


## 第 38 回（平成 21 年 6 月 10 日）定例会の講和要旨

### 「手稲の自然」～稲穂ひだまり公園等～

元札幌市滝野自然学園長 皆川國男氏



皆川國男先生の話聞いて手稲山麓には、結構、植物が多いのには驚いた。又、その植物が学問的に珍しいものも結構多いことも、更に「落痕跡」「異形葉」等の専門用語、「レンブク草」の語源等々説明を聞かなければ私の様な門外漢には一生覚えることはなかったでしょう。

これだけ自然の残っている手稲山麓が有るここで、私の興味ある鳥獣の種類も多いのは当然なことと確信いたしました。この自然豊富な山を見ながら住んでいる手稲区民として改めて感謝しているところです。

又、アウトレジャーへの限りなき挑戦心を持った先生の行動には、驚きもさることながらうらやましくも思ったのは私だけでは無かったことでしょう。 [文責：伊澤]

### 《手稲の誇りとナゾ：2》 クラーク先生、雪の手稲山登山！

今から 122 年前の明治 10 年（1877）1 月 30 日、先生が先頭に立ち札幌農学校 1 期生ら総勢 16 人が深雪を踏み分け山路をわけ登る。目的は体力の練成と学術実習（地衣類採集）。明治 7 年頃米人デー、関大之らの測量隊が設定した山頂の三角測量標柱のあるところへ着いた。当時 2950 フィート（約 899 米）と測量されていた。ちなみに明治 28 年陸地測量部五万分一図は 983.6 米。クラーク先生とその近くで高い枯木の枝に「ミヤマサルオガセ類」を発見。手が届かないと見るや「オーイ。オレの背中へ上ってアレをとれ！」と雪中四つんばいになる。生徒みなびっくり、畏れ多いと上らない。「ノッポのクロー！（黒岩四方之進）土足で上れ!!」やっとならぬや、先生はペンハロー教授と大喜び「新種だ!!」これらは後にセトウリヤ・クラークとし朝比奈博士は「クラークごけ」と和名をつけたという。（現在北大農学部で標本として保存中。）

登山は生徒達かねて用意の「さん俵」を尻に敷きスロープを雪煙り上げ、滑り下りた。記録を残したチビの大島正徳は背中に背負ったみんなの煎餅を雪穴に転落して見失い、生命から救い出される始末。〈疲れた足を引きずりやっとならぬやと人里に近づくまで落伍者を出さぬよう先生はラストを歩き、部落で馬をやとい歩けなくなった生徒も無事帰校（北 1 条）させたという（担当 N 生）

[→裏面←]

## クラーク博士の標本発見

北大博物館に地衣類 1 点

クラーク博士が 130 年余り前に札幌農学校で採取した地衣類標本。4 月に北大総合博物館で見つかった。

札幌農学校（現北大）の初代教授で、植物学者として知られるイリヤム・スミ・クラーク博士（1843-1918）が、約百三十年前に札幌の周辺で採取した地衣類の標本 4 点のうち、1 点が、北大総合博物館で見つかった。同標本は「クロー」と呼ばれる。

「クロー」は、イリヤム・スミ・クラーク博士が、自らの手集めた標本が、北大として貴重財産として保存されている。七十七年、クラーク博士が同校に赴いた。

標本は、英語で「クラークごけ」と呼ばれた。学校と印字されたラベルが、自ら集めた標本と、一八七七年（明治九年）と「一八七七年（明治九年）」と書かれている。

行方不明の「クロー」は、ハロロ（教員）と、札幌農学校の地衣類採集で採取したと記されている。

地衣類は、菌類と植物の共生してできた複合植物。光を自ら合成する能力がある。コケのようだが、菌類や植物に寄生するものもある。

同標本は、イリヤム・スミ・クラーク博士が、米マサチューセッツ州（現マサチューセッツ）で採取した。クラーク博士は、マサチューセッツ州の植物学者で、日本の地衣類採集で知られている。九十九歳の晩年に、モリノケの地衣類採集で知られている。

約 130 年前 自ら採取

フィールド主義体現

持っていた、その標本は、北大に送られていたという。今回見つかったのは、札幌農学校で採取されたもので、同博物館に四月、イリヤム・スミ・クラーク博士の遺品として保存されている。同標本の採取場所は、札幌農学校の敷地内である。未だにその採取場所は不明である。クラーク博士は七十七年、札幌農学校に赴き、翌年に手稲山に登った。その時、一人を自分の背中に背負い、高い山の峻険に生徒を伴って、高層の地帯に地衣類採集をさせたという。同標本は、イリヤム・スミ・クラーク博士が、米マサチューセッツ州で採取した。クラーク博士は、マサチューセッツ州の植物学者で、日本の地衣類採集で知られている。九十九歳の晩年に、モリノケの地衣類採集で知られている。



## 「手稲鉱山周辺で見聞きしたい、体験したこと」

手稲稲穂 三國 勲 会員

手稲鉱山で生まれ育ち、今も実際に手稲山に何度も足を運び現在の手稲山、手稲鉱山の遺産を見て来た事をお話され、お話の中にはその時の様子、そして愛着が満ちあふれおりました。

金鉱の最初の発見者 農業 鳥谷部 弥平次 (明治 24 年～明治 40 年) 大正 5 年 9 月～元北海道庁技師 石川 貞治 昭和 3 年 10 月～昭和 7 年 1 月 広瀬庄三郎 昭和 10 年 2 月～三菱鉱業 荒川鉱業と鉱業主も変わって行ったが最盛期は昭和 15 年～昭和 17 年頃であった。

昭和 20 年の手稲町の人口は 12,540 人となり文化施設の「協和会館」では映画が上映されたり芝居等も行われ見に行ったこと。

当時の鉱山で働いていた人も一緒に芝居を行っていたことを自分もおぼえてもいる。

又、当時の鉱山郵便局の局長さんは朝鮮人に対して特別に計らってあげることも多く、そのお礼に来る人の対応で大変だった。

警察の人は余り評判が良くなかった。

学校は軽川尋常小学校で手稲鉱山特別教授場として開校。入学式・卒業式は本校で行なわれた。その後、人口増加で宮町下方に鉱山の学校とし三菱が資金をだして手稲村星置尋常小学校が開校。公立であるが建物は三菱の財産であった。

人口が増えるにつれ和田弁や九州弁など言葉の違いが有り大変だったのにくわえ、朝鮮の子供達は言葉がわからない為に入学後一年間は校長が対応し、その後各クラスに配置されたと言う。

先日 11 名ほどの鉱山関係者の話を聞き取りに行ったが、高齢の為か又話の持って行き方が悪いのか質問にはうなずくだけで当時の話を聞き取ることが出来なかったと反省されていました。

そして、子供の頃の遊びとして、輪っこ遊びのほかに米軍戦車が来た時、イタズラで通信ケーブルに触ろうとして米軍に怒鳴られた。又チェーンの切れたのを拾いこれを売って小遣いにした。

カッチャ・ノコギリ・トビ・みかん箱等昔の思いでの品をわざわざ自宅から持参し披露しながら身近に起きた事をはなされた一時間でした。

[文責：濱埜]



[→前面より]

サーテ、ゴム長靴はいて「かんじき」姿だったのか？ 登山コースは三樽別川コースか西野平和の滝コースか？ などナゾである。

クラーク先生が雪足(?)で恩師の背中にのせる姿に煎餅なくして腹ペコの生徒たちも大きな感動を与えられた手稲山の一コマである。

《史料》大島正徳『クラーク先生とその弟子たち』、逢坂信吾『荒井郁之助伝』、池田泰彦提供『手稲山の各年度五万分一地図』及び三角測量点資料各種。

[文責：野村武雄]

【註】表面の図は北海道新聞(5月19日)の記事である。「クラーク博士は七七年の帰国前、一期生とともに手稲山に登った際、学生の一人を自分の背中に乗せ、高い木の樹皮に生えた地衣類を採らせたエピソードもあるという。」と記されている。

### 次回の予定

次回(8月12日)は、虻田花和牧場経営田中幹之助氏の講演『「14歳で拓北農兵隊の員として」曙の地に入植」と條野雄・会員の研究発表『「琴似から見た手稲」—手稲屯田兵4代目—』を予定しております。